

# 「武蔵野」 国の名より先

## 文人の 武蔵野

「ムサシ(ムサシ)」という言葉は、「武蔵」よりも「武蔵国」よりも先にありました。では、「ムサシノ(ムサシノ)」はどうでしょうか。

大正期の初めに刊行された並木仙太郎「武蔵野」(民友社、1913年)には、「思ふに武蔵野の名先づありて後武蔵国の名出でたりしにや。往時武蔵野と云へるは、其域頗る廣く、東西南北幾十里、只夫れ満目荒涼たる大平原なりしなるべし」とあります。そこでは、武蔵野の名は武蔵国の名よりも先にあったと仮定しています。

### 並木仙太郎 ①



並木仙太郎「武蔵野」  
(武蔵野大学蔵)

著者の並木仙太郎は、徳富蘇峰(1863~1957年)の秘書を務めた人物です。陰の立場に徹していたのか、詳しい経歴などが表に出ることはほとんどないのですが、翻

訳者や編纂者としてわずかに名前を残しています。

その中で、蘇峰やその会社の仕事と直接は関わらないと思われる唯一の著作物が、この「武蔵野」です。並木の「武蔵野」は、生涯に1冊、自身のために世に出した本なのではないかとひそかに思っているのですが、どうでしょうか。

さて、並木が「武蔵野」の名先づありて後武蔵国の名出でたりしにや」と考えた根拠はどこにあるのでしょうか？

武蔵国(ムサシノクニ)の誕生よりも少し後に編纂された万葉集の歌には、「武蔵国」という国名も「武蔵」という地名も登場しません。歌に詠まれるのはもっぱら「武蔵野」、あるいは「无射志野」でした。並木も万葉集に残る「无射志野」という表記に注目しています。「武を蔵める場所」という分かりやすいイメージは、漢字が当てられた際に後付けで生まれたもので

ある可能性があります。

歌は、耳から聴いて口から発することばの営みの中で、その音と意味とが身体の記憶に刻まれ育まれ、「5・7・5・7・7」の音律をもつことばの文化として継承され、内面化された後に文字化されたと考えられます。

歌を詠む私たちの祖先が、歌のことばとして「ムサシ(ムサシ)」や「ムサシノクニ」ではなく、「ムサシノ(ムサシノ)」を選んだのは、そのほうがしっくりくるからではないでしょうか。感覚的にしっくりくるということは、それだけ長くかつ深くなじんできた証左になります。

(武蔵野大学教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

\*

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。